

スラブ・ゲルマン言語接触

— 中欧言語連合現象および
チェコ語・ソルブ語・ポラブ語の分析性 —

本 城 二 郎

0. 序論

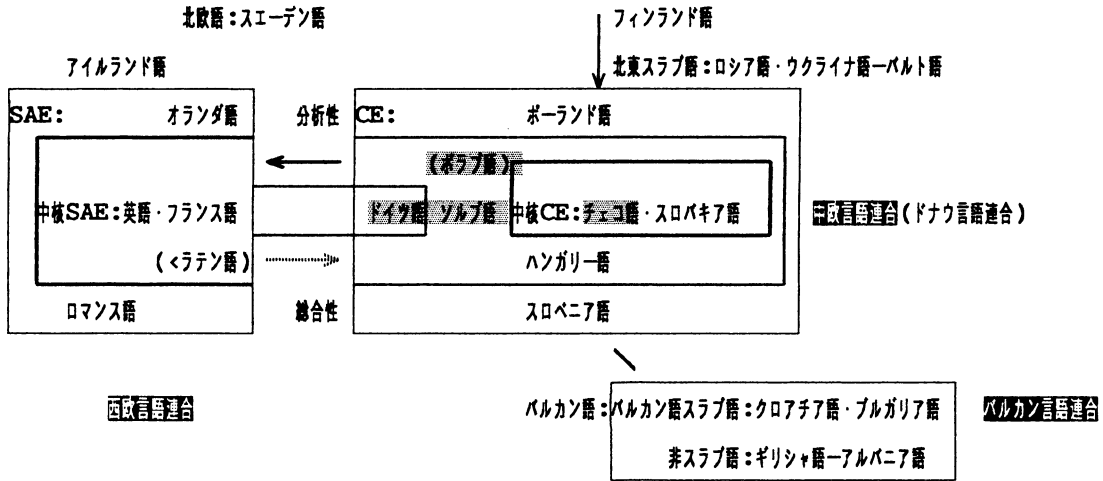
所謂スラブ文化のゲルマン化は比較的明確に現れている一方、スラブ化ゲルマン文化は顕在的でないという点で、文化接触による影響の偏在性が存在する。言語のレベルでも、同様の偏在性が観察される。現実的には、ゲルマン化はドイツ化またはドイツ語化を指し、以下の言及はそれに従う。具体的には、ドイツ語に隣接する西スラブ前線言語としてのポラブ語、下・上ソルブ語、チェコ語における数百年に渡る接触影響の結果、それぞれの程度の順、つまりポラブ語＞下・上ソルブ語＞現代チェコ語、でゲルマン化が実現されてきたと推定される。18世紀中のポラブ語の死滅、ドイツ語圏内言語島ソルブ語における広範なドイツ語借用およびゲルマン化文法現象、現代チェコ語の特にボヘミア・モラビア方言の特異なドイツ語借用およびゲルマン化文法現象などは、それを裏づける言語的事実と見なされる。ドイツ語との長期に渡る言語接触を通じ、西スラブ前線言語は他のスラブ語に例を見ない新しい共通言語現象を形成したと考えられる。他方、スラブ語との接触の結果、ドイツ語には、他のゲルマン語に例を見ない新しい言語現象の発生および古い言語現象の保持の痕跡が見られる。総合タイプ形態法としての語屈折、起動動詞起源の未来の助動詞、(haben-完了vs.sein-完了による)能格タイプ分析完了形、(特にシレジア方言に見られるwasに代表される)関係小辞などが前者に、分析受動形が後者に属すると考えられる。このような2言語接触の結果としての地域的ミクロ類型の特徴(この場合中欧語CE)は、標準均一的欧州語SAEが示す全域的中心的マクロ類型の特徴vs.周辺的特徴の対立の中に位置づけることにより、収束化へと向かう接触変化のダイナミズムの反映体とみなすことが可能である。第1章においては、SAEの類型の特徴から見たCEの類型の特徴を概観し、全欧州の特徴の一つとしての中欧語の共通言語特徴つまり中欧言語連合現象を抽出する。次に、西スラブ語・ドイツ語接触の結果としての、特に分析性の強化に見られる、ミクロ類型の特徴を観察し、スラブ語・ゲルマン語言語接触により形成された共通言語特徴を跡づける(2章)。第3章は、現代チェコ語の個別文法事象、特に名詞と動詞の文法カテゴリー(3.1)および文法構文(3.2)の2つのレベル、つまり言語体系内で比較的影響を受けにくい中心部分としての文法体系のレベル、におけるゲルマン化現象の実態

を観察し、チェコ語・ドイツ語言語接触の偏在的影響関係を検証する。

1. 欧州語のマクロ類型の特徴と中欧言語連合現象：標準均一欧州語SAEと中欧語CE

欧州語は、系統的多様性ととも、その類型的多様性の混在によっても特徴づけられる。ラテン語から現代ロマンス語（特にフランス語）への急激な言語的変革は、隣接するアングロサクソンをも巻き込み、西の広範な地域を代表する西欧語と称される標準均一的欧州語SAEを形成をもたらしたと考えられている。他方、東の地域では、個別言語のみならず、それを含む幾つかの言語地域ににおいて、ある種の共通した類型的特徴の束が、個々の言語変化および相互の言語接触を通じて、形成されたきたと考えられる証拠がある。バルカン言語連合現象Balkan Sprachbundが比較的良好に知られているが、それ以外にも中欧言語連合Mitteleuropäischer Sprachbundの存在が確認されている。中欧語CEと呼ばれる言語には、3つの異なる系統に属する言語、つまりドイツ語ーゲルマン、チェコ語・スロバキア語（中核CEまたは中核スラブCE）・ポーランド語・スロベニア語・クロアチア語ースラブ、ハンガリー語ーフィノウゴル、がある。それらに共通の類型的特徴としては、総合的形態法の保持と定動詞付き主格ー対格文形式の使用があげられる。前者は西の境界に、後者は東の境界に關与的な特徴で、それぞれドイツ語の語屈折Wortflexion、ポーランド語を含む北東スラブ語（さらにはバルト語）の述語的機能の分詞中性形が対応している。注目すべきは、ドイツ語の位置で、一方でSAEに中核CEを結びつける仲介言語として分析的統語法の移入という役割を果たし、他方で自らCEの所属言語として総合的形態法の修正的保持を実現しているという点である。このようなヤヌスのタイプのドイツ語と隣接する中核スラブCE言語としての西スラブ語（18世紀中に死滅したポラブ語およびドイツ語圏内言語島を形成する上・下ソルブ語および現代チェコ語）との接触、つまりスラブ・ゲルマン言語接触は、中欧言語連合現象、つまりCEの共有言語特徴、さらには欧州全体のマクロ類型論における位置づけを通じて、その輪郭を明らかにすることが可能である。

欧州語マクロ類型論と地域言語連合：



(注) 〰〰〰はスラブ・ゲルマン言語接触前線語を示す。

欧州語のマクロ類型の特徴：

中心の特徴	移行の特徴	周辺の特徴
《分析タイプ》	《総合タイプ》	
形 欧州化 (SAE)		個別化
態 孤立タイプ WE1	屈折タイプ/膠着タイプ	語幹屈折タイプ
《分析化＝欧州化》		《総合タイプの残存》
統 定動詞付き主格－対格人称文 WE2		非定動詞（述語機能の分同中性）文、斜格非人称文
語 分析形式（前置詞による格の代用、総合的過去に代わる分析的完了、分析的受動、関係詞、冠詞） WE3		古形式（呼格、前置詞なし具格、総合的過去：アオリスト
力 中心的现象	周边的现象	・未完了・完了、総合的受動、ゼロ関係詞、ゼロ冠詞）
テ 能格タイプ分析的完了be－完了vs. have－完了 WE31	一般化have－完了/非能格タイプ（＝スラブ語タイプbe＋能動過去分詞）	
ゴ 分析的人称受動（～被動作主の前量化） WE32	非人称再帰受動（～被動作主の背景化）	
リ 疑問詞起源の関係代名詞 WE33	関係小詞	
I 前置冠詞 WE34	後置冠詞 （注）WE:SAEにより代表される西欧語およびそのマクロ類型の特徴をさす。	

中欧言語CE連合の共有形態統語の特徴：

- CE1. 総合的名詞屈折 CE2. 形容詞・副詞の総合的比較変化（全て総合的） CE3. 過去非示差的単純3時制体系
 CE4. 起動タイプの分析未来
 CE41. 代未来的現在と分析未来の併存 CE42. 起動の助動詞 CE43. 文法・語派生的特徴に起因する未完了vs. 完了の分析未来と前接未来の意味分布
 CE5. 分析受動 CE6. 疑問詞起源の関係代名詞

例 1 . CE1. 総合的名詞屈折（屈折タイプのドイツ語、語幹屈折タイプのスラブ語、膠着タイプのハンガリー語）

ドイツ語： 単主 Wort(語) 複主 Wört-er	Kopf(頭) Köpf-e	Hand(手) Händ-e
単属 Wort-es	Kopf-es	Hand-φ
チェコ語： slov-o slov-a	hlav-a hlav-y	ruk-a ruk-y/ruc-e
slov-a	hlav-y	ruk-y
ハンガリー語： szó szav-ak	fej fej-ek	kéz kez-ek
szav+-(j)a/e	fej+-(j)a/e	kéz+-(j)a/e
cf. フランス語： mot mots	tête têtes	main mains
/孤立タイプ/ du mot	de la tête	de la main

例 2 . CE3. 過去非示差的 3 時制体系（ドイツ語：現在vs. 単純過去－te↯完了sein/haben＋過去分詞vs. 未来、

チェコ語： “ 完了起源の過去byl+1-分詞↯状態完了mit+1-分詞 “
 ハンガリー語： “ 単純過去－t/ot/ett/öttのみ “)

ドイツ語： Ich habe gelesen. (↯Ich las.)	Ich habe es gemacht.
Ich bin gekommen.	
チェコ語： (Já) jsem přečetl.	(Já) mám (to) uděláno.
(Já) jsem přišel.	
ハンガリー語： (Én) olvastam.	(Én) (azt) eltettem.

(En) jöttem

cf. チェコ語: Tys dělál. / 総合化 / -Ty jsi dělál. ポーランド語: Widzia/em. Jam by/. / 総合性の強化 /

cf. スロベニア語: Imám posprávljeno. = チェコ語: Mám poklizeno. / 新しい結果状態受動 /

cf. 英語: I read. ↔ I have read. / 動化 have-完了 /

例 3. CE4. 起動タイプの分析未来と代未来的現在の併存

文法・語派生的特徴に起因する未完了 vs. 完了の分析未来と前接未来の意味分布

(未完了の場合3言語とも分析未来、完了の場合3言語とも前接未来)

CE42. 起動的助動詞 (ドイツ語 werden, チェコ語 budu < 古教会スラヴ語 bŭdŭ, ハンガリー語 fogni < vmibe fogni)

(~となる)

(成長して~となる)

(~を始める) < 何かに向かい つかむ

ドイツ語: Ich ziehe mich (gleich) an und gehe.

Morgen werde ich den ganzen Tag im Garten arbeiten.

チェコ語: Obléknu se a půjdu.

Zítřa budu pracovat celý den na zahradě.

ハンガリー語: Felöltözök és elmegyek.

Holnap egész nap a kerben fogok dolgozni.

cf. スロベニア語: Jáz bóm prišél. ポーランド語: Będę czytać/Będę czyta/. / なるタイプ /

クロアチア語: Slávko će vid(j)eti Märiju/Slávko će da vidī Märiju. / 敬するタイプ /

ウクライナ語: Читатимуть/Я б́у́ду читати. 北ロシア方言: Буду делать. / 持つタイプ-古教会ス: 敬する・持つ・行く3タイプ /

英語: I will work in the garden all day long tomorrow. < 古英語 willan (敬する)

例 4. CE5. 分析受動 (ドイツ語 werden+過去分詞, チェコ語 býti+受動過去分詞, ハンガリー語過去分詞: -t/ot/ett/ött)

ドイツ語: Dieses Buch wurde für die Studenten geschrieben.

チェコ語: Tato kniha byla napsána pro studenty.

ハンガリー語: Ez a könyv a diákok számára íródott.

cf. チェコ語: Všechn čaj byl vypit (hosty)/Všechn čaj se vypije. / 分析受動と再帰受動の併用 /

ブルガリア語: Писмото беше написано. / 分析受動/Писмото се пише. / 再帰受動/Там продават мякло.

スエーデン語: Han såges ha gift sig. / 再帰受動 /

/ 3人称複数による受動 /

例 5. CE7. 疑問詞起源の関係代名詞 (ドイツ語: 固有の指示詞起源 der と SAE 系疑問詞起源 wer, チェコ語: 疑問詞起源 který

と人称代名詞+小詞: jenž, ハンガリー語: 疑問詞起源 a-疑問代名詞 ki/mi; 関係小詞は、ドイツ語の方言、チェコ語の口語のみ、それぞれ可能)

ドイツ語: der Mann, dem ich das Geld gab.

☞ 定冠詞・指示詞と同系語 der

チェコ語: ten chlapec, kterého jsem včera viděl.

☞ 疑問代名詞と同系語 který

ハンガリー語: a lány, akinek levelet írtam.

☞ 定冠詞と同系接辞 a-+疑問代名詞 ki (誰)/mi (何)

→ ドイツ語シレジア方言: der Mann, was ich ihm gab das Geld. ☞ 疑問代名詞と同系語 was

→ チェコ語口語: ten chlapec, co jsem ho včera viděl.

☞ 疑問代名詞と同系語 co=関係小詞

cf. ドイツ語口語: Die Diebstähle, was hier jeden Tag gesehen

チェコ語文語: Krádeže, co se tu každý den stávají

(注) 上記用例は Kurzová(1997) に若干の修正を加え引用。

2. 西スラブ語・ドイツ語言語接触: チェコ語・ソルブ語・ポラブ語の分析性

西スラブの前線言語、すなわちポラブ語と下・上ソルブ語とチェコ語は、何世紀にも渡るドイツ語との接触の結果、支配言語ドイツ語にとって代わられたり（ポラブ語）、類推・模倣により特徴的な文法現象を産みだしたり（下・上ソルブ語）、あるいは産みだしつつあったり（チェコ語）、ドイツ語借用語・表現を大量に受け入れたり（3言語とも）して、異なる程度のゲルマン化を実現してきた。言語接触の度合いは、支配言語と被支配言語の2言語併用状態に誘発する同化・異化により決まると考えられる。被支配言語の視点からは、接触開始→2言語併用状態→音声・語彙借用→類推・模倣現象産出→クリオール化／完全被支配・死滅という言語変化のプロセスが成立する。チェコ語は類推・模倣によるゲルマン化文法現象を19世紀に産み出しはじめ、ソルブ語はさらにクリオール化に向かい、ポラブ語は18世紀中の死滅へと至ったのである。以下に、接触最前線言語ポラブ語とソルブ語における若干のドイツ語類推・模倣文法現象をとりあげ、さらに両言語およびチェコ語における中欧語CE共有言語特徴の検証を通じて、これら対ゲルマン西スラブ前線言語の類型的特徴を観察する。全体的には、マクロ類型的特徴としてのSAE⇒ドイツ語の分析性増大への関与的特徴が検証される。現存資料によると、ポラブ語は、若干のスラブ古語法は残すものの、語彙借用に続く形態・構文のゲルマン化を実現していた時期があり、ドイツ語の強い影響下、多くの統語的変形を産みだした。例えば、否定属格の保持に対し、中世低地ドイツ語モデルの借用動詞+前接辞・小詞による複合動詞の派生、不定詞に代わる前置詞付動名詞、非人称構文の人称化、werden起源の助動詞 *vardót* 動作受動および *sein* の類推による助動詞 *bait* 状態受動の併存などである。否定属格の対格代用も散見されたが、かなり部分的であったようだ。前置詞 *kā* (チェコ語 *k*) の“目的”使用は、ドイツ語の機械的模倣であり、対応する高地ドイツ語 *zu* (低地ドイツ語 *to, te*) が不定詞付加であるのに対して、明らかに動名詞付加と見なされる。動名詞使用の理由は、他のスラブ語同様、不定詞の主機能の一つ“目的”に限定することにあった。それ故、動名詞と不定詞の分離は、ドイツ語の *zu* 付不定詞と *zu* 無し不定詞の分離と直接結びつくことになる。ドイツ語の *zu* 使用が、意味的に動機づけられるのに対して、ポラブ語の *kā* 使用は、統語的に動機づけられていた。この点でも、ポラブ語の *kā*+動詞はなおドイツ語 *zu* 不定詞対応表現の直前にあり、“目的”の前置詞付動名詞構文の未発達な（知覚動詞などに限定される *k*+動詞をもつ）上ソルブ語や、(*jít k*+動詞「～に行く」*dojit k*+動詞「～の状態になる」など少数の慣用句が存在するものの、目的の機能としては専ら *aby*-従属節を用いる) チェコ語より、ゲルマン化が一步進んでいたことが観察される。チェコ語のゲルマン化は、すでにマクロのレベルでは、前章のCE共有言語特徴におけるドイツ語との関係が観察されたが、その接触期間の長さおよび接触現象の多様さから、ミクロのレベルでの検証が可能かつ必要である。紙

面の都合上、詳細は次節にゆだねることにする。

ポラブ語のゲルマン化現象：

ソルブ語のゲルマン化現象：

与格・対格の混用: momě jim(与格)=momě jeg(対格=異格)ノ

新しい借用派生複合動詞: 低地ドイツ語 to-vist(=zufahren)ノ

derě-dal(=abziehen)

非人称構文の人称化: tū gramě. <<gramě. 雪が鳴る。ノ

目的を表わす不定詞代用表現: ká+動名詞(動作動名詞): -ně/-ěノ

ván mo sádat = Er soll es tun.

dod₃ mine ká pait'ě(=ドイツ語: gib mir zu trinken)

新しい分析的完了形: bāit(=sein)+過去分詞 / 自動詞/ノ

分析的過去: 完了: Ja sym díě/a/a. 私は働いた。(上ソルブ語)

met(=haben)+過去分詞 / 他動詞/

過去完了: Ja běch díe/a/a. 私は働いていた。(上ソルブ語)

jā vāpodeně. 彼は中に落ちた。

<byćの未完了

ván mo nodenā. 彼は勝った。

分析的未來 (<不完了体動詞のみ): Budu pisać. 私は書く。

(上ソルブ語)

分析的受動形: bāit(=sein)+過去分詞 / 状態受動/

分析的受動: być+過去分詞

vārdot(<中低ドイツ語 werd+ati)+過去分詞 / 動作受動/ノ

buch(=ドイツ語同義語 wurde)+過去分詞

Jā zazoně. それは焦っている。 / 現在時を指す状態受動現在形/

wordować(=ドイツ語 werden)+過去分詞 (上スラブ語口語)ノ

(=ドイツ語 Er ist verbrannt)

Buchmy wuzamknjeni. cf. Won bu wučer.

Vārdā āirūdeně. 彼は産まれるだろう。 / 未來時を指す動作受動現在形/

(=ドイツ語 Er wird geboren werden.)

指示代名詞(先行詞) - (疑問代名詞「どれ」と同系の)関係代名詞による関係節: ノ

kātū ci sarāt, to aid. 座りたい者は行ってもいい。

挿入語をもつ関係節: S-O/Adv-V//S-v-O/Adv-V

(上ソルブ語の無標関係節)ノ

Nan trawu syče. 父が芝生を刈っている。

Wona je m/oda by/a. 彼女は若かった。

Hdyž je wona m/oda by/a... 彼女が若かった時...

cf. Sie ist jung gewesen. (ドイツ語)

Ako wona jo by/a m/oda... (下ソルブ語) / 特別なタイプ/

/複合動詞は義務的の特別なタイプ/

疑問詞起源の関係代名詞: kotryž/kotaryžノ

(注) ノは分析性の高まりを表す。

(上ソルブ語)(下ソルブ語)

用例はComrie & Corbett(1993)に準拠。

3. チェコ語・ドイツ語言語接触

現代チェコ語におけるゲルマン化の痕跡は、通説によると、19世紀前半から20世紀

初めにかけての3言語(ラテン語・ドイツ語・チェコ語)話者グループ共存時代頃までに遡る。一般的に、言語接触による変化には、直接的借用>修正借用>欠如現象補完という時間的優位関係が存在し、この順序で異言語受容が進み、完成すると考えられる。言語体系内部を見れば、語彙体系の変化→形態体系の変化→文法体系の変化、つまり周辺体系→中心体系への変化の完成がそれに相当する。具体的には、助動詞体系の中心にある*muset*、生産的タイプの動詞活用語尾*-ovat*、さらに分析的完了アスペクト形 *mit* + 動詞分詞などは、その時間的順序で、ドイツ語の影響を受けた結果、現代チェコ語文法体系の中に確立されていたことが分かる。以下に、チェコ語のゲルマン化に關与的と見なされる個別文法現象を、上記接触変化プロセスの中に位置づけ(通時的ゲルマン化)、CE言語連合共有言語特徴(共時的ゲルマン化)との関係を探る。全体として、修正変化(冠詞的代名詞など)および欠如現象補完(分析的完了アスペクトなど)が特徴的である。

3. 1. ゲルマン化文法カテゴリーの特徴：

チェコ語の文法カテゴリーは、名詞類と動詞類に大別される。名詞類カテゴリーには、性・数・格が、動詞類カテゴリーには人称・数・時制・法・態・アスペクトが、義務的に表示される。ゲルマン化については、名詞類カテゴリーにおける影響を跡づけることは困難ではあるが、類似現象からの推論は可能である。例えば、チェコ語における冠詞の未発達は、一方では一般vs.個別、不定vs.定(語彙的・概念的限定)、未知vs.既知(文脈的限定)などの意味対立表示のための文法手段として語順や文脈や代名詞等を、他方では後続名詞に対する性・数・格の意味的限定のための文法手段として名詞屈折語尾を、それぞれ一元的に使用していることから説明可能である。それと平行して、指示代名詞 *ten/ta/to* と複合代名詞形 *tento/tato/toto*, *tamhleten/tamhleta/tamhletto* には若干の相違が存在し、前者は文脈的限定を、後者は語彙的・概念的限定(および文脈的限定)を、それぞれ表示すると見なされている。これは、一種の定冠詞の原型であろうか。つまり、現代チェコ語には、従来の代名詞的用法 *tento/tamhleten/tuten* 系列に対する冠詞的用法 *ten* 系列の部分的分化が生じつつあると推測される。不定冠詞は未発達で、不定性表示には *jeden/nějaký* が代用されるが、専ら強調の意味をもつ。通言語的には、冠詞を持つ他の言語、特に英語・フランス語・ドイツ語における冠詞2類の発達順序から明らかなように、定冠詞→不定冠詞の順が一般的であり、そこからチェコ語における定冠詞的代名詞の分化と不定冠詞的数詞・形容詞の未分化が説明可能である。冠詞による性・数・格限定を(既になくした英語に対し、それを)未だ残すドイツ語との影響関係から見れば、チェコ語における定冠詞的代名詞 *ten/ta/to* の存在は、名詞類におけるゲルマン化の一例と考えられる。

チェコ語: Byl jednou jeden král a ten král měl tři syny.

ドイツ語: Es war einmal ein König und der König hatte drei Söhne.

チェコ語: Na schůzi mluvil (nějaký/jeden) ředitel. /文頭テーマ(T)既知・定//文末レーマ(R)未知・不定/

ドイツ語: In der Versammlung sprach ein Direktor.

↑

チェコ語における定・不定決定要因のヒエラルキー: 文位置による定・不定 > 文脈的限定のtenと非限定のnějaký

(注) 用例はPovejšil(1994)およびPovejšil(1997)に準拠。以下も同様。

動詞類カテゴリーについては、人称・数(動詞派生の分詞における性)における主語と定動詞との一致関係より、チェコ語はドイツ語とのかなりの対応を示す。唯一の相違は、代名詞主語の義務的使用の有無である。ドイツ語の義務的代名詞主語に対し、(特に標準)チェコ語の定動詞人称語尾つまりゼロ代名詞主語が一般的であると見なされている。しかしながら、対照強調や主観的語順(R-T語順)の場合、有標の代名詞主語が現れ、一種の文体的バリエーションが許容される。更に進んだ代名詞主語の文法化(義務化)が、文法的ゲルマン化現象を構成する。チェコ語の西ボヘミア方言や共通チェコ語には、そのような傾向が比較的顕著である。

チェコ語: Já mu tu knihu půjčím, ale ty tamtu knihu půjčit můžeš. / 対照強調 /

私は 彼に その本を 貸します。 だが 君は あの本を 貸してもいい。

ドイツ語: Ich leihe ihm das Buch. Ich leihe ihm das Buch.

チェコ語: A tys to věděl!(Cf. Vědělš to ty.) / 主観的語順 R-T語順 /

で 君が それを 知っているのだ! それを知っているのは 君だ。

ドイツ語: Und du hast es gewußt!

(注) 太字はIC(Intonation Center)を持つ要素を示す。

次に、時制・法・態・アスペクトのゲルマン化について考察する。ドイツ語は、チェコ語のような語彙的アスペクト形式、つまり完了体vs. 完了体の対立を持たない。(完了の)結果vs.(完了の)状態の対立は、文脈的解釈つまり動詞の語彙的意味の副詞的限定に頼らざるを得ないのである。一見すると、チェコ語のアスペクト形式の方がより発達していて、ゲルマン化現象を見出すのは困難なように思える。しかし、現代チェコ語口語における状態完了カテゴリーが、新しい分析的形態mit+対格目的語+n/no/na/nyを発達させ、若干の意味的相違にもかかわらず、ドイツ語の完了時制への接近を示していることから、これも分析性へ向かうゲルマン化現象の一つと見なすことが可能である。

チェコ語: Mám pokoj uklizený(/Mám v pokoj uklizeno). Já jsem si uklidil pokoj.

部屋は 片づいた。

私は (自分のために) 部屋を 片づけた。

Někdo mi uklidil pokoj.

ドイツ語: Ich habe das Zimmer aufgeräumt.

誰かが (私のために) 部屋を 片づけてくれた。

(私は) 部屋は 片づけた。

態のカテゴリーに関しては、歴史的には、古スラブ語以来の能動vs. 中動⇒能動vs. 受動への推移が確立している。中動態に起源とされる再帰受動se(再帰代名詞)+動詞形(他動詞/自動詞)が、最初の受動形式となり、中世のラテン語受容時期に分析受動být+n/no/na/nyが発達したとされる。これと平行的に、動詞自体のアスペクト対立、つまり完了体vs. 完了体が完成し、その結果、受動態における完了受動vs. 完了受動の対立が発生することになる。他

方、ドイツ語は、既に完成していた分析的形式に加え、繫辞sein/werdenの機能的分化により、状態受動vs.動作受動の対立形式が確立することになる。チェコ語のゲルマン化に向けての最初の変化は、分析受動から始まり、その後新しい受動カテゴリーとして結果受動が形成されたと考えられる。再帰受動がチェコ語に本来的なアスペクト対立を実現するという点で、汎用されている一方、新しい分析的完了アスペクトmit+n/no/na/nyの発生は、ドイツ語の完了との形式的一致ともあいまり、結果受動の強化をもたらし、最終的にはドイツ語の状態受動へと繋がっていくことになる。時制については、チェコ語動詞は、単純形では、完了体動詞で未来を、不完了体動詞で現在進行を、分析形では、完了・不完了体動詞の過去(být+1/lo/la/li/ly)および不完了体動詞の未来を、それぞれ表わすが、分析的完了アスペクトの発生により、ゲルマン化現象としての新しい完了時制が形成されるつつあると考えられる。ゲルマン化されずに残った動作受動カテゴリーについては、未だ未発達ながら、bekommen系統あるいはwerden系統のいずれかのゲルマン化が予想される。以下に、チェコ語に特徴的なゲルマン化として、受益者受動（与格受身）を検証する。

受益者（与格）受動は、スラブ語の中ではチェコ語のみに可能な表現で、これは長年に渡るドイツ語との言語接触の結果、bekommen受動に対応するdostat(もらう)+^{与格}の文法化と見なされる。

チェコ語:Pavel dostal (od Petra) vynadáno. Pavel dostal (od Petra) vynadáno.

彼は 其の本を 貸して もらった。

パベルは (ペトルに) 与られた。

ドイツ語:Er hat das Buch geborgt bekommen.

3. 2. ゲルマン化構文の特徴:

文の文法的構成は、まず動詞要素とそれに結合する要素との関係、つまり結合価により決定される。2つ（以上）の動詞要素の結合価のタイプについては、自由結合と文法的結合の2種が存在する。単一（主）動詞がそれと結合する他の動詞要素と結合価を持つ場合の文法的構成のタイプを構文と規定すれば、不定詞構文、分詞構文、動名詞構文などが対象となる。後二者は、その特殊性・固定性により、観察の対象とはなりにくく、不定詞構文におけるゲルマン化現象が専ら観察の対象となりやすい。不定詞構文の発達は、とりわけ西スラブ語に顕著で、チェコ語のドイツ語への接近は、かなり明かある。主動詞と不定詞化した（従属）動詞との緊密な統語的結合を実現する不定詞構文の発達は、文構成における名詞的表現への傾向を助長し、ゲルマン語に特徴的な複合的圧縮による分析化実現の一例と見なされる。この特徴は、他の分析化文法現象、例えば分析的形式的主語の発達や、非人称構文から人称構文への推移などの現象にも支えられていることは明かである。

使役の不定詞構文:nechat/dát=lassen/machen+^{与格}目的語+不定詞(～させる)

チェコ語:Nechal mě stát za dveřmi.ドイツ語:Er ließ mich vor der Tür stehen.

しかし、zdát se (mi), že ~ (～のように思われる) ÷scheinen (mir) zu-不定詞 (～のように思われる)

より、チェコ語は従属節を保持:Zdá se, že mnoho zažila.ドイツ語:Sie scheint viel erlebt zu haben.

知覚・感覚の不定詞構文: vidět/najít=sehen/finden+対格目的語+不定詞(～するのが見える/わかる)

チェコ語: Našla ho ležet na zemi. ドイツ語: Sie fand ihn auf dem Boden liegen.

しかし, cítit, jak ~ (～のように感じる) ≒ spüren+対格目的語+不定詞(～するよう感じる)

より, チェコ語は従属節を保持: Cítím, jak mi buší srdce. ドイツ語: Ich spüre mein Herz klopfen.

非人称構文の人称構文化:

チェコ語の主語は人称語尾表示が無標で、人称代名詞主語使用は有標となり、強調または確認文における弱い文脈照応を示す。

チェコ語: Jeho matka mám rád. Je to/Ona je milá stará paní. (to:弱い文脈照応/ona:強調)

ドイツ語: Seine Mutter mag ich. Es/Sie ist eine liebe alte Dame.

4. 結論

欧州語のマクロ類型的プロセスとして、以下の潮流が確認された。i. SAEに代表される西欧語の類型的特徴としての分析性が、仲介語としてのドイツ語を窓口として、東に隣接する中欧語CEへと向かい、広範に伝播してきた。他方、ii. ドイツ語を含む中欧語CEが、いくつかの類型的特徴を共有することにより収束化を実現し、いわゆる中欧言語連合が形成されてきた。古い欧州語に特徴的な総合性が優勢なスラブ語の中でも、スラブ中欧語、特に西スラブ語は、ドイツ語との長年に渡る言語接触を通じ、他の中欧語に例を見ない分析的形態・統語法を産み出しつつある。西スラブ前線言語としてのチェコ語・ソルブ語・ポラブ語に見られる分析性の度合いおよび手段には、次のような特徴が見られた。iii. チェコ語<ソルブ語<ポラブ語、iv. チェコ語の冠詞的代名詞・分析的完了アスペクト・受益者受動・“目的”の不定詞構文による複合圧縮、ソルブ語の状態受動vs. 動作受動・枠構造・疑問詞起源の関係詞、ポラブ語の中低ドイツ語借用動詞派生複合動詞・haben-完了vs. sein-完了・状態受動vs. 動作受動・不定詞機能の前置詞付き動名詞。

参考文献:

- R.G.A. de Bray (1980): *Guide to the West Slavonic Languages*, Slavica Publ.:Ohio.
Comrie B. and G.C. Corbett (1993): *The Slavonic Languages*, Routledge:London.
Erhart, A. (1982): *Indo-Europäische jazyky*, Academia:Praha.
Horálek, K. (1992): *An Introduction to the Study of the Slavonic Languages* Vo.1
& 2 (tr. by P. Herrity), Astra Press:Nottingham-England.
Kurzová, H. (1997): "Morphosyntactic processes in Europe", *Proceedings of LP'96*
(ed. by Palek, B), pp.279-294, Charles University Press:Praha.
Povejšil, J. (1994): *Mluvnice současné němčiny*, Academia:Praha
Povejšil, J. (1997): "Tschechisch-Deutsch", *Kontaktlinguistik*, pp.1656-1662,
Walter de gruyter:Berlin.
早稲田みか (1995): 『ハンガリー語の文法』, 大学書林:東京.